

第17回オーライ！ニッポン大賞 受賞者の概要(11団体・者)

No.	都道府県 市町村	受賞者名	概 要	
オーライ！ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)				
1	徳島県 三好市	一般社団法人 ^{さと} そらの郷	徳島県西部圏域「にし阿波」地域は、著しい人口減少、過疎に対抗して交流人口拡大による観光地域づくりを目指して、そらの郷を創設した。体験型教育旅行の誘致・受入れ体制整備と誘致受入活動を実施している。また、一般客向け地型旅行商品の企画開発、販売、促進、流通等の活動を展開している。教育旅行は農家民泊を中心に、急傾斜地での農作業、野菜や果樹の収穫、田舎料理作り、歴史探訪、かずら細工、わら細工の伝統工芸、阿波おどり、地域の人との交流などをプログラム化している。厳しい山村環境の生活文化が世界から高く評価されるようになり、地域の生活文化に対する誇りや自信、その文化を継承していくことを再認識されるようになっていく。また、伝統的な農業が世界農業遺産に登録されたことにより、地域に住む人々や伝統的な農業に対する関心が高まり、その風景と相まって、日本の原風景として、内外から高い関心を呼んでいる。	
オーライ！ニッポン大賞				
2	岐阜県 恵那市	おくやはぎ 奥矢作移住定住促進協議会	現代の農山漁村を悩ます大きな課題である空き家を解消し、集落人口を増やすために移住定住の促進を展開している。活動のきっかけは、台風による大水害により、河川に流れ込んだ流木等の後始末に立ち上がり、その後、森林の再生と空き家対策に乗り出した。地域の空き家(意向)調査を行い、移住希望者が購入した家をボランティアで改修するリフォーム塾を実施している。移住後、新規就農した若者は、東農地区の野菜部門で優秀賞を獲得するなど活躍している。また、協議会の事務局も移住者によって担われているほか、小学校を廃校の危機から守るためにも子育て世帯の移住が効果を上げている。	
3	岡山県 津山市	^{むら} あば村運営協議会	村は無くなっても“むら”はある。市町村合併により中山間地域にあった公的サービスがどんどん縮小しているなかで、地域住民が自ら様々な事業を担い、生活を守っていく好例。もれバケツ理論により、地域からお金が流出しないように、住民出資の合同会社を立ち上げ、ガソリンスタンドや商店など地域内のサービスの循環体制を調え、特産品づくり、ツーリズム(視察も含め)、再生エネルギーなど組み合わせで地域の外からお金を稼ぐ仕組みを作りだしている。あば温泉や宿泊施設等を連携させながら、インバウンドツアー、体験ツアー、視察ツアーをそれぞれの主体が企画実施している。また7年間で29世帯 59人(延べ数)の移住Uターンが生まれ、地域への新しい刺激も生まれている。	
4	長崎県 大村市	有限会社シュンシュ	観光農業で消費者に感動を与え、後継者に希望を与える夢のある新しい農業を目指した取り組みにより、第5回審査委員会長賞を受賞した。さらに都市と農村の交流活動を発展拡大させ、大村市グリーン・ツーリズム推進協議会の事務局を担い、農泊事業はこれまで20カ国から受け入れをした。イチゴ狩りなどの農業体験は、自社直営農場のほか、地域農家20カ所と連携し、年間利用者数2万人と大好評である。柔軟に新たな取り組みを開発し、最近ではUIターン就農希望者対象の農業インターンシップをはじめ農業研修生受け入れ制度や定年帰農者を対象とした農業塾も実施している。さらに食育活動として農業体験を小学生や中学生を中心に親子で参加できるプログラムを実施し、国内外を問わず多くの来訪者がある。	
オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞				
5	新潟県 三条市	特定非営利活動法人 ソーシャルファームさんじょう	農業を核とした人財育成と新たな発想や共通価値を想像することで、経済的社会的利益を生み出すことを目指している。三条市地域おこし協力隊を受入れ、隊員の活動を支援しながら、多様なイベント、スポーツ合宿、棚田再生等を実施している。また、滞在型職業訓練施設“しただ塾”を開講し、観光やアウトドアをテーマに人財育成を実施している。名産のサツマイモの地元農家と連携し芋焼酎の商品化に取り組んだり、半農半バスケットの3人制プロチームを発足させるなどユニークな取り組みを展開している。	
6	静岡県 浜松市	静岡文化芸術大学 ^{いなさこうさくたい} 引佐耕作隊	2016年4月結成した静岡文化芸術大学の学生による「引佐耕作隊」は、①久留女木の棚田における耕作放棄地を水田として再生すること。②耕作放棄地で収穫したコメのパッケージをデザインし商品化すること。③商品化したコメを販売することによって持続可能な米作りを展開している。2017年度のNHK大河ドラマ「おんな城主直虎」のロケ地としても注目された棚田の約4分の3は耕作放棄地となっている。引佐耕作隊は、耕作放棄地の再生や棚田の価値を都市住民に広く伝えることを目的に松戸修一准教授が授業の一環で立ち上げた。	

オーライ！ニッポン大賞 審査委員長賞

7	和歌山県 田辺市	株式会社 ひなたや 日向屋	全国で苦勞している鳥獣被害対策と特産品化の取り組みをUターンした若者が中心となっており取り組んでいる。ジビエ肉を活用する飲食店が増加し、都市農村交流活動や日向屋ブランドの販売を通じ、日向地区を広くPRすることで地区のファンも増えている。耕作放棄地の増加に歯止めがかかるとともに地域の雇用創出、次世代への農業の魅力の継承、障がい者雇用に対する理解に繋がっている。設立当初は地元住民のみの活動であったが、地域外の方も加わり、「地元の土を動かすのは地元の人、風を吹かすのは地域外の人間」という、良い構図ができていく。次の世代が憧れる農業の形として、カッコよく、価値を生み出し、革新的な農業を目指す【農業における新3K】を①農家による獣害対策 ②農家による新しいビジネスへの挑戦 ③農家による地域活動】目標としている。	
オーライ！ニッポン ライフスタイル賞				
8	山形県 朝日町	志藤 一枝 (しとう かずえ)	千葉から山形に嫁ぎ、英語塾主宰を経て町の保育園に勤務。得意の英語を生かし32年間、山形県のホームステイボランティアホストを行っていた。農家民宿の経営後、山形県グリーンツーリズム協議会の指導の下、「農家のお宿の会(会員15名)」を立ち上げ、代表として就任した。また自家栽培のりんごを素材にした新しいスイーツを開発し、東京をはじめ全国主要都市への物産展や駅で、試食・販売を実施し、山形市のかすり屋和菓子店とコラボし、りんご・麴・チーズクリームの餡をどら焼きの中に包み込んだ『麴焼き』は、インバウンドへのお土産品として商品化に至り、「日本の宝物グランプリ山形大会」でグランプリを獲得した。	
9	岐阜県 白川町	塩月 祥子 (しおつき しょうこ)	武蔵野美術大学でデザインを学び、結婚を機に名古屋に帰郷し予備校講師(デッサン)などを経て、名古屋から白川町に移住した。建築の勉強をしていた夫と、自分たちでストローベイルハウスを建てたいと考えたが、無農家の妻を使いたいが、長い葦でないと、ストローベイルに加工できないため、昔ながらの「はさ掛け」をする米作りをしようと2006年、「はさ掛けトラスト」を立ち上げた。アートで町を盛り上げようと立ち上げた、「一般社団法人アートアンサンブル白川」は、2018年初回イベント「アートであっとおぼけやしき」を地域の芝居小屋「東座」で開催して、2日間で445人集客し、その後もアーティストインレジデンスの活動を続けている。	
10	京都府 舞鶴市	岡山 茉莉 (おかやま まり)	子育てをしながら、絵を描く特技を生かしてイラストや漫画を描いたり、真牡蠣の通販、農業手伝いしたりと多方面で活躍する主婦。舞鶴市出身の寡黙な夫と、やんちゃな三兄弟とともに海のそばの古民家で5人暮らし。漫画を描いて「舞鶴での田舎暮らし」を発信しつつ大手企業からの依頼でイラストを制作している。また、夫が生産する「朝どれ殻つき真牡蠣」の全国通信販売は、SNSを活用して新鮮さをアピールし、売り上げも好調。漁業を手伝う傍ら、夫の祖母に農業を教えてもらい米や野菜作りも始め、それらを市内の直売所や通信販売もしている。	
11	鹿児島県 霧島市	和田 新藏 (わだ しんぞう)	霧島ふもとの駅は、「子供達の体験学習の町づくり」を大きなテーマに掲げ、新鮮野菜や加工品を販売する「笑顔市場」、飲食を提供する「笑顔亭」、軽食コーナーの「茶ちゃランド」3つの機能をもつ交流拠点。それぞれの名前には、小中高生に公募して命名した。買い物難民の為、また、地元の皆さんの交流の場として、和田代表をはじめ約10名が出資して平成30年7月21日にオープンした。スタッフは約20名、出荷者は約190名。今後は、100年続く街づくりの礎として、子どもたちの体験学習のプログラムづくり、昔懐かしい小川でメダカや沢蟹と遊べるような親水公園づくり、誰もが汗を流して農作業できる市民農園、都市部からUターンしたくなる移住者団地などの構想実現に取り組む。	